

広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第66号 2017 143-149

自己の多面性と抑うつとの関連に対する アイデンティティの間接効果の検討

木谷 智子

(2017年10月4日受理)

The Relationship between Self-complexity and Depression:
The Mediating Role of a Sense of Identity

Tomoko Kitani

Abstract: This study investigated the hypothesis that self-complexity affects depression by mediating the person's sense of identity. University students ($n = 168$) participated in this study and completed a questionnaire. The results of mediation analyses indicated that a sense of identity partially mediated the relationship between self-complexity and depression. A sense of identity comprises the following four factors: (1) identity of self-sameness and its continuity, (2) self-identity, (3) interpersonal identity, and (4) psychosocial identity. Covariance structural analysis was used to investigate the mediation effect of the sense of identity on self-complexity and depression in more detail. The results of the analysis revealed that self-complexity is negatively related to self-sameness and its continuity as well as interpersonal identity. Further, self-sameness and its continuity and self-identity are negatively related to depression. There was no relation between self-complexity and psychosocial identity. It is considered that a person with self-complexity directly confuses it with the sense of core identity (self-sameness and its continuity and interpersonal identity) and indirectly confuses it with the sense of self-identity; as a result, it causes depression.

Key words: Identity, Self-complexity, Depression

キーワード: アイデンティティ, 自己の多面性, 抑うつ

1. 問題と目的

アイデンティティ形成とは、今までの自分を問い直し、社会の中に自己を位置づけていく作業である(Erikson, 1959)。そのため、アイデンティティの形成には、自分が斉一性と連続性を持っているという内的な同一性の感覚と、その自分が社会の中で他者から見られている自分と一致している、つまり、社会の中に居場所を得ているという社会的同一性の感覚の2つの

感覚を兼ね備えていることが必要である。

谷(2001)は、自己斉一性・連続性の感覚と、心理社会的同一性の感覚に、「対自的同一性」「対他的同一性」を加え、アイデンティティを4つの次元から測定する尺度を開発している。まず、「自己斉一性・連続性」は、自己の不変性および時間的連続性についての感覚。「対他的同一性」は、他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚とされる。また、「対自的同一性」は、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されているという自己意識の明確さの感覚である。さらに、「心理社会的同一性」は現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を意味する。アイデンティティの感覚

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員: 岡本祐子 (主任指導教員), 杉村和美,
服巻 豊

において最も中核的な部分は、自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性があるという自己斉一性・連続性である（谷，2008）。

青年期において、人は多様な社会的役割を有することになる（Erikson, 1959）。しかし、社会的な役割に応じて自己が一貫していないこと、つまり自己が多面的であることは、アイデンティティの中核的な感覚としての斉一性・連続性を混乱させる（Block, 1961）。実際、社会的な場面において自己が多面的であることは、抑うつ、不安、神経症傾向などの精神的健康の低さと関連することが示されている（Block, 1961; Donahue, Robins, Roberts, & John, 1993）。

しかし、社会の変化に伴い、青年のアイデンティティの構造の質的な変化が指摘されている（浅野, 1999; 高石, 2009; 辻, 2004）。アイデンティティは、社会の中で形成されるものであるが、現代社会は、Erikson (1950) がアイデンティティ論を提唱した時代における社会とは大きく異なっている。今日、青年が関わる場やその場で担う社会的役割は多様化し（Gergen, 1991）、さらに場における価値基準が大きく分化している（溝上, 2008）、それぞれの場から与えられた役割に同一化するのであれば、自己を統合し、斉一性・連続性を持たせることは今まで以上に困難な作業になる。

このような社会においては、今までのように、社会的役割における自己を一貫した自己に統合することを自ら求めず、複数の自己を使い分ける青年が増加しているとされている（成田, 2001; 高石, 2009; 浅野, 1999）。辻（2004）は、現代青年を理解するための自我構造のモデルを示している（Figure 1）。(a) の社会的役割における自己を「一つの本当の自分」に統合するような自我構造を一元的自我構造、(b) の「本当の自分」を一つに統合せずに、複数の本当の自分を並列させるモデルを多元的自我構造として示し、現代の青年は (b) の自我構造を有しているのではないかと考察している。そのため、複数の本当の自分を持つことが可能になり、自分を場面によって使い分けているので

はないかと予測している（辻, 2004）。

多元的な自我モデルを想定すると、場面によって自己が変化していたとしても、それぞれの場面でのアイデンティティは一貫しており、一定の斉一性・連続性は保たれる。また、場面に応じて自己が変化したとしても、それらがすべて本当の自分として体験されるのであれば、心理社会的同一性の感覚も維持することが可能である。つまり、現代社会において、自己の多面性がアイデンティティにもたらす影響や、精神的健康に与える影響も変化していると考えられる。

自己の多面性を測定する方法としては、自己が関わる場や役割に応じた、自己の性格特性の分化度、あるいは一貫度を見る方法が挙げられる（Block, 1961; Donahue et al, 1993; Linville, 1985）。Block (1961) や Donahue ら（1993）は、あらかじめ役割を研究者が想定し、それぞれの役割における性格特性を尋ねた。一方で、Linville (1985, 1987) の方法は、自己役割や活動を自己側面として参加者自身に記入させ、それぞれの側面の自分に当てはまる性格特性を表す形容詞を選んでもらうというものである。

自己の多面性は、統計量 H によって測定される（Linville, 1985, 1987）。H 得点は、自己側面の数と、それぞれの分化度によって定義される。自己の多面性は「自己が持つ側面の数（以下、自己側面）」と、その側面における「自己が分化している程度」から定義される。「自己側面」とは自分自身を認知するための側面のことであり、「自己が分化している程度」は、各側面間での性格特性の形容詞がどの程度類似しているかで測定される。自己の多面性の得点は自己側面が多く、更にその側面間で自己が分化しているほど高くなる。例えば「テニスサークルのメンバーの自分」、「友人という自分」、「恋人という自分」という3つの自己側面を持ち、「テニスサークルのメンバーの自分」は「活発」だが、「友人という自分」は「おしゃべり」、さらに「恋人という自分」は「もの静か」、というように側面間の認知が異なる者は、「友人という自分」と「恋人という自分」という2つの側面しかもたず、「友

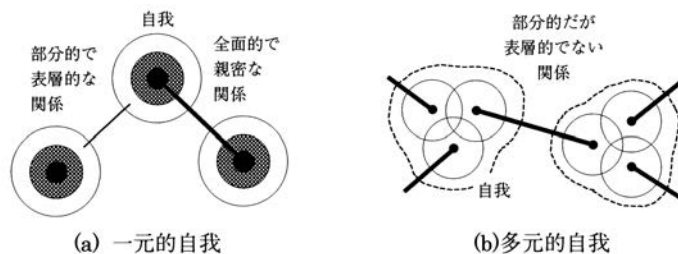


Figure 1 自我構造の2つの模式図（辻, 2004）

人という自分」も「恋人という自分」はどちらも“おしゃべり”という一貫した認知を持つ者に比べて自己の多面性は高くなる。現代社会においては、役割の多様化が進み、研究者側が役割を想定するのは難しい。現代社会における多様な役割を検討するためには、Linville (1985, 1987) のように、役割を参加者に記述させる方法が適切であると考えられる。

従来より、自己の多面性は、アイデンティティの拡散に結び付くとされてきたが (Block, 1961)、近年においては、自己の多面性がアイデンティティの拡散を引き起こさない例も報告されている (辻, 2004)。よって、本研究においては、自己の多面性とアイデンティティとの関連を検討することを目的とする。また、自己の多面性を測定する方法としても、役割の多様化した現代社会において自己の多面性を測定するにふさわしいと考えられる、Linville (1985, 1987) の測定方法、分析方法を用いて検討を行うこととする。

目的 本研究では、現代社会において、自己の多面性がアイデンティティの拡散を引き起こし、精神的健康の低さをもたらすかを検討することを目的とする。具体的には、(1) 自己の多面性がアイデンティティ感覚に負の影響をもたらすか、(2) アイデンティティ感覚は精神的健康に負の影響をもたらすか、(3) アイデンティティ感覚は自己の多面性と精神的健康の関連において間接効果を持つかについて、それぞれ検討を行う。アイデンティティの拡散の感覚は、自分が無いことへの不安感や抑うつ感といった情緒的な落ち込みと関連するとされてきた (Erikson, 1959)。よって、本研究においても、精神的健康の指標として抑うつを用いることとする。

仮説 先行研究 (中谷・友野・佐藤, 2011) において、アイデンティティ感覚の低さは精神的健康の低さと関連することが示されているため、アイデンティティ感覚は精神的健康の低さに負の影響をもたらすと考えられる。また、現代青年が Figure 1の (b) に示されたような多面的な自我構造を有しているのであれば、自己の多面性とアイデンティティ感覚との間に関連が見られないと予想される。さらに、アイデンティティ感覚は、自己の多面性と抑うつとの関連に対して間接効果を持たないと予測される。

2. 方法

参加者 国立総合大学の大学生 167名 (男性99名, 女性68名: 平均年齢19.37歳: 学年1-4年 (1年生86名, 2年生46名, 3年生3名, 4年生27名, 研究生5名)

手続き 質問紙を配布し回収を行った。調査は2017年

5月に実施した。

倫理的配慮 回答は無記名で行い個人が特定されないこと、回答は任意であること、回答に同意しないことで不利益を受けないことを質問紙の表紙に記述し、質問紙への回答をもって参加者の同意を得たものとした。

質問紙構成 (a) 特性語分類課題, (b) 多次元自我同一性尺度 (MEIS; 谷, 2001) (4因子, 20項目), (c) 改訂版大学生用ストレス自己評価尺度の抑うつ情動的尺度 (尾関, 1993) (1因子5項目), (d) フェイス項目。学年, 年齢, 性別を尋ねた。

特性語分類課題を用いて、以下の式によって、自己の多面性の指標となる H 得点を算出したものを自己の多面性得点とした。

$$H = \log_2 n - (\sum ni \log_2 ni) / n$$

n : 特性語の総数 (今回は n=40)

ni : グループの組み合わせの各パターンに該当する特性語の数

3. 結果と考察

記述統計

使用した各尺度得点の記述統計量を算出した。結果を Table1に示す。

Table 1 各尺度の記述統計量 (N=167)

	M (SD)	Range	α
自己の多面性得点	1.93(0.80)	0.29 - 4.68	—
MEIS得点			
自己斉一性・連続性	23.01(7.63)	5 - 35	.89
対自的同一性	21.06(6.48)	5 - 35	.84
対他的同一性	18.82(6.19)	5 - 34	.85
心理社会的同一性	21.25(6.11)	5 - 35	.86
総得点	84.13(21.22)	31-136	—
抑うつ得点	1.88(0.85)	1 - 4	.91

自己の多面性得点の平均点は1.93であった。統計量 H の理論値の範囲は、最低値が0, 最大値 $\log_2 40=5.32$ であるが、本研究で H は0.29 - 4.68の範囲に分布していた。MEIS の下位尺度と抑うつ得点の α 係数はすべての因子で .80以上であり、十分な信頼性が確認された。

次に、各尺度間の相関係数を算出した (Table 2)。MEIS の下位因子、総得点と抑うつの間には、すべて中程度の負の関連が見られた ($r = -.39 \sim -.55, p < .01$)。また、MEIS の下位因子はどの因子も、MEIS の総得点との間で高い正の関連が見られ ($r = .77 \sim .86, p < .01$)、MEIS の総得点はすべての下位因子を反映し、アイデ

Table 2 使用尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. 自己の多面性	—						
2. 斉一性・連続性	-.18 *	—					
3. 対自的同一性	-.06	.47 **	—				
4. 対他同的同一性	-.26 **	.62 **	.27 **	—			
5. 心理社会的同一性	-.09	.64 **	.55 **	.61 **	—		
6. MEIS総得点	-.18 *	.86 **	.79 **	.77 **	.86 **	—	
7. 抑うつ	.29 **	-.53 **	-.40 **	-.39 **	-.41 **	-.55 **	—

※2-5はMEISの下位尺度得点, 6はMEISの総得点を示す * $p < .05$, ** $p < .01$

ンティティの感覚を示すものであると考えられる。

自己の多面性はアイデンティティの感覚と関連しないという仮説に反し、自己の多面性は、MEISの下位因子における斉一性・連続性、対他同的同一性、MEISの総得点との間に弱い負の関連が見られた（順に、 $r = -.18, p < .05$; $r = -.26, p < .01$; $r = -.18, p < .05$ ）。

自己の多面性と抑うつの関連におけるアイデンティティの間接効果

自己の多面性、アイデンティティ感覚、抑うつにそれぞれ関連が見られたため、自己の多面性がアイデンティティを媒介して、抑うつに結びつくかどうかについて、媒介分析を用いて検討を行った。自己の多面性、MEIS総得点、抑うつ3つの変数の相関変数はすべて有意であり、媒介分析の前提となる関連は確認された。

抑うつ得点を従属変数、全体としてのアイデンティティ感覚を表すMEISの総得点を媒介変数とする媒介分析を行った。媒介分析の結果をFigure 2に示した。

媒介変数を組み込む前の、自己の多面性から抑うつへの直接効果は $\beta = .29 (p < .01)$ 、媒介変数としてMEIS総得点を組み込むと、直接効果は $\beta = .19 (p < .01)$ と減衰した。ブートストラップ法（ブートストラップ標本数2,000）による間接効果の検定の結果、間接効果は有意であった（95% CL: .02～.19）。しかし、媒介変数を仮定しても、自己の多面性と抑うつとの間に有意な関連が見られていることから、自己の多面性と

抑うつに対するアイデンティティ感覚の間接効果は部分的なものであると考えられる。

自己の多面性からアイデンティティに与える影響に関しては、弱い負の影響が見られた $\beta = -.18 (p < .05)$ 。このことから、自己の多面性はわずかにアイデンティティ感覚を混乱させると考えられる。アイデンティティ感覚と抑うつの関連について、MEISから抑うつに対しての影響は、 $\beta = -.51 (p < .01)$ と中程度～強い影響を示した。つまり、アイデンティティの感覚を持ってないことは、抑うつの感覚に強く影響を与えと言える。一方、アイデンティティの感覚の、自己の多面性と抑うつの関連に対する間接効果は部分的なものであったことから、自己の多面性と抑うつの媒介変数には、アイデンティティ以外の要因も存在していると予想される。

以上より、現代社会においても、自己の多面性はアイデンティティ感覚を混乱させ、抑うつと結びつくと言えるが、その影響は少ないと考えられる。

アイデンティティ感覚の下位因子の間接効果の検討

自己の多面性と抑うつに対してアイデンティティ感覚の間接効果が検証されたため（Figure2）、より詳細な検討を行うために、自己の多面性得点が、MEISの各下位因子を媒介して、抑うつに寄与するという仮説モデルを立て、構造方程式モデリング（SEM）を行った。まず、自己の多面性からMEISの下位因子にそ

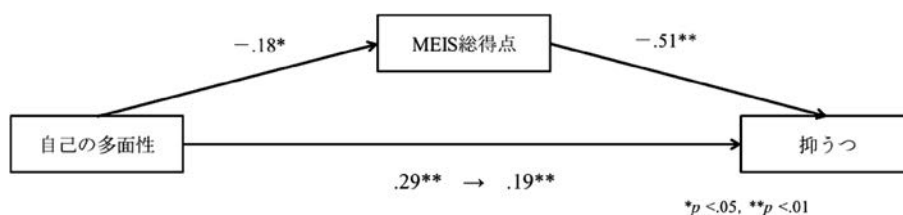


Figure 2 自己の多面性から抑うつに対するアイデンティティの間接効果の検討

れぞれパスを引いた。また、MEIS の下位因子から抑うつへ、それぞれパスを引いた。さらに、MEIS の下位尺度間は相互に関連する概念であるため、共分散を仮定した。モデルの適合度は、 $\chi^2(15)=20.50$ ($p=.000$), GFI=.962, AGFI=.599, CFI=.944, RMSEA=.235であった。また、より当てはまりのよいモデルを作成するために、作成したモデルから、有意でないパスを取り除いた。自己の多面性から MEIS の下位因子へのパスは、斉一性・連続性と対他者の同一性のみ有意であり、対自的同一性と心理社会的同一性に対しては有意なパスが見られなかったため、対自的同一性と心理社会的同一性へのパスを除いた。また、MEIS の下位因子から抑うつへのパスは、斉一性・連続性のみが有意であり、対他者の同一性と心理社会的同一性からのパスは有意ではなかった。よって対他者の同一性と心理社会的同一性からのパスを除いた。その結果、モデルの適合度は $\chi^2(15)=.82$ ($p=.000$), GFI=.998, AGFI=.983, CFI=1.000, RMSEA=.000 であり、より適合度が高いものとなったため、本モデルを採用した (Figure 3)。

各変数間の関連を見ると、まず、自己の多面性から、MEIS の自己斉一性・連続性と対他者の同一性に負のパスが見られた (順に、 $\beta = -.18$, $p<.05$; $\beta = -.26$, $p<.01$)。次に、MEIS から抑うつへの影響に関しては、斉一性・連続性と対自的同一性から負のパスが見られた (順に、 $\beta = -.40$, $p<.01$; $\beta = -.20$, $p<.01$)。また、MEIS の下位因子間には、中程度～強い相関 ($r=.26 \sim .63$, $p<.01$) が見られた。

本モデルから推測すると、自己の多面性は、アイデンティティの感覚に対しては、斉一性・連続性、対他

的同一性に負の影響をもたらす。アイデンティティの下位因子間の相関は強いいため、自己の多面性が斉一性・連続性・対他者の同一性に与えた負の影響が、間接的に対他者の同一性や社会的同一性にも影響する。また、アイデンティティ感覚の下位因子においては、斉一性・連続性と対自的同一性の感覚の低さが抑うつに影響すると考えられる。

まず、自己の多面性がアイデンティティ感覚の自己斉一性・連続性と対他者の同一性の感覚に影響を与えていたことについて考察する。まず、自己斉一性・連続性の感覚である。自己斉一性・連続性の低さは、自分のなさを意味する。自己の多面性は、アイデンティティの核の無さや不安定なアイデンティティを意味するとされており、現代においても、Block (1961) の指摘と同様に、自己の多面性はアイデンティティを混乱させ、自分が明確でないことは、抑うつと結びつくと思われる。また、自己の多面性は、斉一性・連続性以上に、対他者の同一性の感覚にも負の影響を与えていた。対他者の同一性とは、「他者からみられている自分が本当の自分自身と一致しているという感覚 (谷, 2001)」である。自己の多面性は、場面によって自分が認知する性格特性が異なっていることを示す。場面によって自分が異なっていることは、本当の自分と一致している場面とそうでない場面があるという感覚、あるいは、それぞれの場面で、自分の全体を見せてはいないという感覚につながりやすく、対他者の同一性の低さに影響していると考えられる。

自己の多面性からの影響を直接受けてない対自的同一性から抑うつへの負の効果が見られたことについて

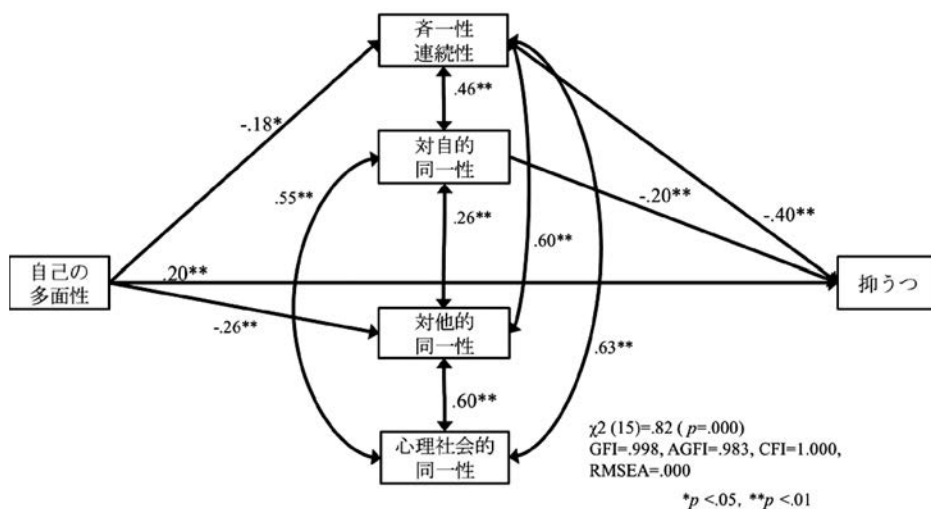


Figure 3 自己の多面性からアイデンティティの下位因子を媒介した抑うつへの影響

は、以下のような説明が可能である。谷（2008）は、MEISの下位因子は、幼少期から形成される「中核的同一性」と、青年期において、社会の中で形成される「心理社会的自己同一性」の2つの側面に分けられることを示している。「中核的同一性」にはMEISの下位因子における斉一性・連続性と対他的同一性が含まれ、「心理社会的自己同一性」には、対自的同一性と心理社会的同一性が含まれる。「中核的同一性」は、幼少期からのアイデンティティの形成を基盤とし、精神的にはより内的な層を構成する。また「心理社会的自己同一性」は、外界の現実、社会とのかかわりが大きく影響する概念であり、アイデンティティ概念における社会とのつながりをより強く反映しているとされている（谷，2008）。社会適応においては自己の多面性は必要な場合も多い。そのため、自己の多面性は、外界とのかかわりが影響する対自的同一性と心理社会的同一性に対して直接的に負の影響を与えないと考えられる。しかし、自己の多面性は、斉一性・連続性と対他的同一性という「中核的同一性」を混乱させるために、間接的に、対自的同一性という「心理社会的自己同一性」に影響を与えると予測される。

4. 本研究の成果と今後の課題

本研究の目的は、現代社会においても、自己の多面性がアイデンティティの感覚を混乱させ、精神的健康の低さと結びつくかどうかを明らかにすることであった。本研究においては、アイデンティティは、自己の多面性と抑うつとの関連に対する間接効果を持つことが示された。このことから、仮説とは異なり、現代社会においても、自己の多面性はアイデンティティ感覚を混乱させ、精神的健康の低さと結びつくことが明らかになった。しかし、自己の多面性からアイデンティティへのパスは有意ではあったものの、値が小さい点や、アイデンティティの間接効果は部分的な媒介であった点からは、自己の多面性が、直接的にアイデンティティの拡散と結びつかない可能性も示唆される。

まず、自己の多面性がアイデンティティに与える影響が小さい点について考察する。この理由として、自己の多面性がアイデンティティに与える影響が人に応じて異なる可能性が考えられる。Figure 1の(a)のように、一貫自我構造を持つ青年を仮定すると、自己の多面性はアイデンティティの拡散に結びつきやすく、自己の多面性がアイデンティティの感覚に与える影響も大きくなるが、(b)のように、多元的な自我構造を持つ青年を仮定すると、自己の多面性は直接的にアイデンティティを拡散させず、自己の多面性がアイデン

ティティの感覚に与える影響は小さくなると予想される。よって、今後の研究においては、量的な分析にとどまらず、青年が自己の多面性をいかに捉えており、どのようにアイデンティティと結びついていくかについて質的な差異を検討する必要があると思われる。

また、自己の多面性と抑うつとの関連に対してアイデンティティは部分的な媒介であったことから、自己の多面性と抑うつを媒介する他の要因が存在していると予想される。先行研究においては、場面における変化が適応的なものかどうかについては、変化動機が影響するという知見もあり（佐久間・武藤，2003）、変化動機や変化理由も自己の多面性と抑うつを媒介する要因となりうると予測される。今後は、アイデンティティ以外の要因を増やして自己の多面性と精神的健康の関連を見る必要があると考えられる。

【引用文献】

- 浅野智彦（1999）. 親密性の新しい形へ. 富田英典・藤田正之（編）. みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's展開編— 恒星社厚生閣. pp.41-57.
- Block, J. (1961). Ego identity, role variability and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- Donahue, E. M., Robins, R.W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993). The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self-concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 834-846.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生（訳）(1977・1980). 幼児期と社会1・2 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton. (エリクソン E. H. 西平直・中島由恵（訳）(2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Gergen, K. J. (1991). *The saturated self: Dilemmas of identity in contemporary life*. New York: Basic Books.
- Linville, P. W. (1985). Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Linville, P. W. (1987). Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.

- 溝上慎一 (2008). 自己形成の心理学—他者の森を
け抜けて自己になる— 世界思想社.
- 中谷陽輔・友野隆成・佐藤 豪 (2011). 現代青年に
おいてアイデンティティ (自我同一性) の危機は顕
在化するのか パーソナリティ研究, 20, 63-72.
- 成田善弘 (2001). 若者の精神病理—ここ20年の特徴
と変化— 岩波新書佐久間路子・無藤 隆 (2003).
大学生における関係の自己の変異性と自尊感情との
関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- 尾関友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度
の改訂—トランスアクション分析にむけて—
久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 99-114.
- 高石恭子 (2009). 現代学生の心の育ちと高等教育に
求められるこれからの学生支援 京都大学高等教育
研究, 15, 79-88.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構
造: 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育
心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦 (2008). アイデンティティの捉え方 岡田勉・
榎本博明 (編) シリーズ自己心理学第5巻 パーソ
ナリティ心理学へのアプローチ金子書房 pp.6-21.
- 辻 大介 (2004). 若者の親子・友人関係とアイデン
ティティ—16~17歳を対象としたアンケート調査の
結果から— 関西大学社会学部紀要, 35, 147-159.